

安倍 志摩子(朝日海洋開発)、田中 和友(大船渡地区消防組合)

1. はじめに

筆者の住む東北地方では、過去9回の水難学会指導員養成講習会が開催され、その都度地域の指導員たちと自主的にスキルアップ勉強会を行ってきた。しかし、2020年のコロナ禍以来、指導員養成講習会はオンライン開催が主となり、東北地方で勉強会を実施することもなくなった。そんな昨年の秋に、ある指導員から指導員養成講習会開催を尋ねられた。長年、ういてまで授業に帯同している後輩が指導員資格を取得したいとのことであったが、指導員養成講習会開催は未定であると回答した。

また、東北地方でもコロナ禍により、指導員養成講習時に実技講習を受けられず、オンライン講習のみで資格を認定された指導員も少なからず存在することから、実技を伴う勉強会を開催した。

本発表では、実技を伴う勉強会開催を通して確認できた、現状の問題点と展望を考察する。

2. 開催した勉強会の概要

開催目的は「小学校児童を対象とした水難事故防止教育」をテーマとした模擬授業を通して、最新知見の確認と実践授業に対しての授業評価等の意見交換であった。参加者は、水難学会会員(7名)、水難学会元会員(7名)、指導員資格未取得者で小学校での「ういてまで授業」指導経験者および指導員資格取得志望者(5名)、協賛会社の新入社員(2名)であった。開催場所は、宮城県総合運動公園「セントラルスポーツ 宮城グランディ・21プール」であった。勉強会の内容は、講義(担当:安倍 淳)では、①指導員が有すべき最新の知見、②「シンういてまで」の概要を、プール実技では、①「小学校ういてまで授業の実際」の模擬授業(担当:田中 和友・安倍 志摩子)と、②「シンういてまで」の実技紹介(担当:安倍 淳)を行った。

3. 勉強会を受講した感想(勉強会後のアンケート調査から)

(1) 講義(120分)

まず、参加目的としては、①知識と手技のアップデートをしたい ②「ういてまで」の指導法を知りたい ③「シンういてまで」の成り立ちや内容を知りたい、等であった。

次に、講義で良かった点は、①最新の指導員が有すべき知識(特に、プール監視の注意事項)を得ることができた ②統計の見方を再認識できた ③事故調査の検証結果は非常に参考になった ④データや根拠をもとに指導することの重要さがわかった ⑤復習とアップデートができた ⑥「シンういてまで」の重要性が理解できた ⑦「シンういてまで」プログラムが、防災の視点で展開されていることを理解した。

(2) プール実技(150分)

まず、参加目的としては、①自分の指導方法は時代にあっているか ②他指導員の45分授業の進め方やカリキュラム構成を参考にしたい ③児童を惹きつける言葉を知りたい ④「シンういてまで」の内容を知りたい、等であった。

次に、プール実技で良かった点は、①授業の流れが良く分かった ②児童を引き付けるコツを学べた ③学齢に合わせたカリキュラムが大切なことが分かった ④浮けない児童や背浮きを怖がる児童に対する指導法など、参加者同士で意見交換をしながら学び合うことができた ⑤「シンういてまで」の実技は全て勉強になった。

(3) 感想

①実技研修の機会がしばらく無かったので、大変勉強になった ②指導員同士が実技を検討し合い、指導の標準化につながるとも大切な研修なのでぜひ継続してほしい ③ライフセーバーとして、ヘルプサインに疑問を持っていたので解説を聴いて解消された ④他団体の批判ではなく、データの裏付けと根拠を示した解説だったので納得できた ⑤水難学会を退会した自分や新人にも、今回の勉強会の機会を与えていただいていたがたかった。

4. 考察と課題

今回、久しぶりに地域での勉強会を企画した中で、参加者が多いことに勉強会開催の必要性を認識した。参加者の中には、①長年助手的に指導に携わってきたが指導員の肩書が欲しいと切実に訴える方、②急に消防業務として着衣泳指導を命じられ「不安しかありません」と話す水難救助隊員、③10年以上前に、指導員資格を取りアップデートを望んでいる方、④今後、指導員資格を取得して、子どもたちを水の事故から守りたいなど、地域には学びの場を求めている方々が大勢いた。今後は、水防災の核心部分を地域特性に合わせながら、指導展開できるような体制を作れるよう、各々の地域での「水難事故防止教育」の活性化につなげたい。